

終戦時玉音放送の回想

木村喜蔵第四中隊長のお便りより



坂元 直彦

予科6-8

航空4-1

(那須塩原市)

はじめに

昨年11月初めに、航士校第四中隊長木村喜蔵中隊長殿より細かい字で便箋数枚にびっしりと認められたご芳信を拝受しました。最近中隊長殿は白内障の手術を受けられたのですが、それまでは電気スタンドの下で拡大鏡を使って手紙を書いておられたのです。御令室多以子様の病状芳しくなく付き添って老体にむち打って看病しておられるとのこと読む人の涙を誘うお便りです。

その中から特に航士校四中隊（吉野隊）の方々には是非目を通して頂きたい終戦の玉音放送に関わる回想文をここにご紹介いたします。

昭和天皇が昭和20年8月15日正午、玉音放送されたにも拘わらず「戦争継続を叫ぶ人」と「承諾必謹」の人が現れた。

坂元君ご存じの通り、玉音放送が始まると同時に数名の区隊長が壇上に躍り上ってコードを切断、抜刀して徳川校長に詰め寄った。

咄嗟に私は「第四中隊！ 回れ右！ 舎前に向かって前進！」と号令して第四中隊長舎前に向かう。

生徒舎前に着くや否や、私は大声を発し、諸君に次のようなことを力説したことを今覚えております。即ち「唯今、矛を収めよとの大命が降下された。進むも退くも大命のまま。これぞ皇軍の神髓なり。軽拳妄動は断じて許さぬ。再び立てと仰せられた時は、中隊長が先頭を駈けて突進するので、皆は従いて来たらよい。」と訓辞。その直後、区隊長を中隊長室に集め「まず区隊長が承諾必謹の意志を固め、軽拳妄動しないように生徒を指導するように」と厳命し、即時に生徒舎入口に歩哨を立て、「中隊長の許可なく生徒舎への出入りを禁ず」と守則。

その後、毎日の如く中隊長会議が開催された。ある時、第六中隊長今泉少佐あ「かの玉音放送は側近の奸官に強要されて仕方なく天皇が放送された」と発言された。咄嗟に木村は「恐れ多い事を申されるな。我々が信奉する大元帥陛下はそんな腰抜けだと思われるのか？」と反論。今泉中隊長曰く「区隊長が言っている」と。「今泉そんなことを区隊長に言わせるとは以ての外」と木村。今泉氏血相変えて「何だと」。その時、吉井生徒隊長が、「木村！最後の言葉を取り消せ」。木村「今泉さん、失礼しました」で一着落着。中隊長の中にも確乎たる信念の持ち主少なし。他の中隊長は騒然。生徒が弾薬庫を急襲するは、脱走して立て籠もる生徒。航士校は全軍最後まで騒然。

8月24日、宮様が来校、天皇の真意を伝達され、初めて平穩になる。

戦後のある日の中隊長会で、第三区隊長萩原貞治君が「木村中隊長のお陰で第四中隊長は粛々と復員できた」と発言すると、「生徒さんが偉かったからでしょう」と家内(多以子令夫人)がさらりと言ってくれた。

注：(1)「陸軍士官学校第六十期生史」第388頁、田矢一夫①の回想録によれば、まわれ右の号令は吉井第一生徒隊長がかけたことになっているが、思い違いかもしれ

ない。

(2) 筆者の頭に包帯の写真、正月早々転倒して、眉間に向う傷。ただし、生命には別状なし。